



北方民族博物館だより

No.82



H9.67 結婚式用蓋付白樺樹皮製容器 長さ 27.9cm 高さ 21.3cm

ナーナイ ロシア/コムソモリスクナアムール/リサ=グレゴリーブナ=バラノバ作

丸めた白樺の樹皮に円い底をつけ、筒の形にします。筒の部分と底の部分はヤナギの根を割いて作った糸で縫い合わせます。筒の表面には渦巻きや鳥、魚、蝶、カエル、トカゲなどの模様が飾られます。模様は、筒の表面を黒く染め、その表面をけずって浮き上がらせたり、黒く染めた別の白樺の樹皮を貼り付けたりして作ります。この資料は、結婚式用の樹皮製容器として作られました。

- 1 表紙 結婚式用蓋付白樺樹皮製容器
- 2 第26回特別展「ウイльтаとその隣人たち-サハリン・アムール・日本 つながりのグラデーション」
- 4 講習会「写真を楽しむカメラ教室」/講座「もっと知りたいトーテムポール」
- 5 講座「アイヌ語副読本の活用をめざして」/北大民族言語学研究室出張講座「ウイльта・カフェ 言葉と唄と遊び」
- 6 INFORMATION

第26回特別展

ウイルタとその隣人たち～ サハリン・アムール・日本 つながりのグラデーション

2011.7.16- 10.16

はじめに

本特別展では、当館が所蔵する約120点の資料で、サハリン島で暮らしてきたウイルタの文化と歴史を、周辺民族との関わりの視点から紹介しました。

ウイルタは2002年の統計で約300人と人口が非常に少ない民族です。先祖は、大陸から渡ってきたと考えられています。サハリン島では、採集、狩猟、漁労とトナカイ飼育を行って暮らしてきました。

サハリン島にはウイルタの他に、樺太アイヌ、ニブフの人たちが暮らし、さらに対岸のアムール流域には、同じ系統の言語を話すツングースの諸民族がいました。ウイルタはこれらの人びとと関わりをもってきました。そのため、ウイルタの文化要素のなかには、こうした民族との共通性が見られます。

19世紀になって北からロシア人が、南から日本人がこの島に入ってくると、ウイルタの生活は大きく変化しますが、また一方で、独特の文化を保ち続けてもきました。ここにはウイルタのたくましさ柔軟性を見ることができます。



展示解説の様子

第二次世界大戦後は、日本に移住してきたウイルタもおり、特に網走との縁が深まってゆきました。例えば、網走観光をPRする親善大使は「流水バタラ」といいますが、バタラとはウイルタ語で娘を意味します。また網走市に移住したウイルタを中心に、ウイルタ、ニブフ、樺太アイヌ等の文化を紹介する北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニも建設されました。

ウイルタに関しては「オロッコ」という呼び名も知られ

ています。日本でのウイルタの記録は1800年代初頭（江戸時代）に遡り、この時に「ヲロコ」「ヲロツコ」という表記が見られます。オロッコは元々はアイヌがウイルタを呼ぶときに使った名称です。ただし、日本に移住したウイルタはこの呼称を嫌い、現在日本国内では使わないほうがよい言葉となっています。

他の北方少数民族と同様、文字をもたなかったため、ウイルタの遠い過去のことを知る手がかりの一つは周辺の文字記録になります。中国史籍に残るウイルタを指すと思われる最も古い記録は、清代の1700年代後半のもので、前述したように、日本の文献にウイルタが登場するのは、江戸時代の1800年代初頭です。この頃の情報がシーボルトによって日本国外にもちだされ、ウイルタがヨーロッパに紹介されることになりました。

中国にしても日本にしても、ウイルタが記録に現れるのは、それほど古いことではありません。このことは、ウイルタがサハリン島に登場したのがいつなのか、あるいはウイルタが一つの民族集団とみなされるようになったのがいつなのかに関係してくると考えられます。

ウイルタの暮らし 樺太庁以前

サハリン島がどこの国に帰属するかは、長い間曖昧にされてきました。安政元（1855）年の日露和親（通交、下田）条約でも、サハリン島は日露共同領有ということになっていました。その20年後の明治8（1875）年に樺太・千島交換条約によって、日本は樺太の領有権を放棄し、千島列島全体を領有することになります。

サハリン島がロシア領となったことによるウイルタへの影響の一つは、ロシア正教です。ウイルタはシャマニズムを信仰していましたが、この時期に改宗した者もあり、またマーリガ、ミケーラなどのロシア風の名前を持つ者も現れます。

そして、日露戦争後の明治38（1905）年のポーツマス講和条約によって、サハリン島の北緯50度以南を日本が領有することになります。

ウイルタは北グループと南グループにわかれており、方言差があります。この二つのグループは、ポーツマス講和条約締結以降、交流が著しく制限されることになり、北のグループはロシア・ソ連の下で、南のグループは日本の下での暮らしが始まってゆきました。

ウイルタの暮らし 樺太庁以降

樺太庁下（日本領）のウイルタの人口は、およそ300名を推移します。樺太のウイルタには最後まで日本国籍が与えられることはありませんでした。

ウイルタを紹介する際によくかれる地名に「オタス（の杜）」があります。ウイルタやニブフ等の集住地であったオタスがいつ作られたのかの公式記録はいまのところ確認できていませんが、昭和元年～2年あたりかと推測されます。樺太庁による管理や生活の変化、親族がオタスに移住することで、他所に暮らしづらくなる、あるいは学校の存在な

どからオタスに積極的に暮らしたいと希望する場合もあり、結果としてウイльтаの多くがオタスに移住しました。

オタスでウイльтаは、漁業や農業に従事していました。しかし農業はそれまでおこなったことがなかったため、かなり困難を伴ったようです。

またオタスはしだいに観光地化され、大勢の日本人観光客が訪れる場となっていきました。関連する文学作品や芸術作品も生み出されています。また、著名な民族学者たちがここを訪れ記録を残しています。

観光客向けには土産品も作られました。白樺樹皮製容器のほか、特にトナカイのなめし革に絹糸で刺繍をした財布や「皿敷き」と呼ばれるテーブルセンター状のものが人気でした。こうしたものは、ウイльтаの生活のなかにもともとあったものではありません。また文様からウイльтаとニブフのどちらが作ったのかを見分けるのは難しいです。

オタスの学校

オタスに教育所（敷香教育所）、つまり学校が作られるのは昭和5（1930）年のことです。敷香教育所では、日本国民としての意識をもち、実技を身につけることに重点が置かれ、約40名の児童がここで学んでいました。



敷香教育所（昭和12年 服部健氏撮影）

学校で指導をしていたのは、川村秀弥氏と夫人のナヲ氏です。川村氏は教員でしたが、しばしば校長先生と呼ばれ、オタス住民からも頼られる存在でした。川村氏は昭和15（1940）年以降は樺太犬の飼育にたずさわることが増え、学校の切り盛りはナヲ氏の肩にかかっていきました。

オタスでウイльтаとニブフと一緒に暮らすようになると両者の関係はそれまで以上に深くなっていきました。ウイльта語とニブフ語は系統関係がまったく違い、言葉は通じません。学校で日本語が教えられるようになることで、日本語が両者の共通語となっていきました。

ウイльтаと戦争

ウイльтаに関して現在も続く問題に、先の戦争に関係する戦後補償問題があります。オタスに暮らしていた男性の

多くがシベリア抑留を体験していますが、日本国籍をもっていなかったことが理由とされて、現在もごく少数の例を除き決着していません。

戦後、サハリン島を出て、北海道や本州に移住したウイльтаもいますがその実数は不明です。

おわりに

展示では、住居模型や白樺樹皮容器など、ウイльтаの資料を中心に、周辺諸民族のものも展示しました。文様は似ていても、刺繍の技法が違ったり、衣服の形は同じでも、装飾の仕方が異なるなど、この地域の共通性の広がりや、民族の独自性をご覧ください。一番大きな資料はトナカイ^{そり}籠で、これはサハリン北部に暮らすウイльтаの方たちやサハリン州郷土博物館に協力をいただき、昨年度収集したものです。このほか、昭和10年代に言語学者の服部健氏がオタスで、1990年代に当館が網走で撮影したものなど、モニターでの紹介を含め数多くの写真を展示しました。

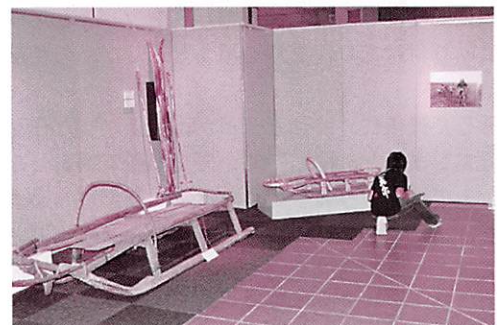
本展の開催にあたっては、中村和之氏、津曲敏郎氏、山田祥子氏、網走市のウイльта刺繍サークルフレップ会のみなさん、サハリン北部に暮らすウイльтаのビビコワ＝エレナ氏、フェジャエワ＝イリーナ氏をはじめとする大勢に協力いただきました。

当館としては初めて展示テーマ曲（「フレップの頃」（フレップはベリー類の総称）をBGMとしましたがこれも好評をいただきました。

（学芸主幹 笹倉 いる美）



刺繍小物の展示風景



籠の展示風景

講習会 写真を楽しむカメラ教室

デジタルカメラで “作品”をつくってみよう！

2011.6.18

講師：小寺卓矢氏（写真家）

昨年5月、開催中だった写真展の関連事業としてデジタルカメラ教室をおこないました。北方民族博物館の催しとしては異色だったのですが、参加された方々には好評だった



ので、今年は少し季節をずらし、再びデジタルカメラ教室を企画しました。講師は昨年と同じ写真家の小寺卓也さんです。

まず最初に講堂で、実際に講師が目の前で撮影したデジタル画像をプロジェクターで大きく映しながら、デジタル写真撮影の基礎的な方法や技術を説明していただきました。ピントの合わせ方から撮影までの初歩的な使い方を確認した後、背景色や切り取り方、縦位置か横位置かといった違いで、被写体の見え方が大きく違ってくことを学び、被写体にピントを合わせて背景をぼかす方法や、露出補正など、ちょっとしたテクニックを使うことによって、写真の雰囲気が変わってくることも教えていただきました。

その後、各参加者が自由に撮影した4枚の写真で「作品」をつくるという実技をおこないました。作品のテーマは「いのち」または「時」を感じるもの、そして単なる「記録」ではなく「表現」を意識するようという課題が出されました。その際、何を、どのように撮影するかという点を意識すること、そして、たくさん撮影した写真のなかから4枚だけを選ぶという作業が大切というアドバイスがありました。

40分ほどの撮影時間の間、参加者は博物館敷地内の芝生や花壇、展示室などで思い思いに撮影をおこないました。その後ふたたび講堂に戻って写真をプリントアウトし、台紙に貼り付けたり、文章を添えたりしながら作品を作りました。

そして最後に、参加者全員が出来上がった作品をお互いに鑑賞しました。同じ時間、同じ場所で撮影したのに、人によって選ぶ被写体や視点には驚くほど違いが表れていました。また4枚の構成や添えられた文章にも工夫が凝らされていて、参加者はそれぞれ自分の作品と見比べたりしながら、驚いたり、感心したりしていました。

（主任学芸員 中田 篤）

講座

もっと知りたいトーテムポール

2011.6.25

講師 岡田淳子（当館館長）

岡田館長を講師に、講座「もっと知りたいトーテムポール」を開催しました。これは、昨年度の講座「20世紀のポトラッチ祭り」を受講された方からのリクエストに応じたもので、北西海岸インディアンの文化についての知識を、更に深めていただくことを目的としました。

以下に内容を紹介します。

「トーテムポール」という語は、おそらくチヌークジャーゴン（北西海岸インディアンと英語話者が意思を疎通させるための混成語）に由来するのではないかと思います。長さ3000kmに渡る地域で広く使われている言葉です。この地域にはトーテムイズムという信仰があります。祖先と関係があったという神話、伝説、説話をもつ動物や植物などの像が図案化されて一種の紋章になっています。つまりトーテムポールはそうした話を刻みつけたものだと理解するとよいと思います。

いくつか刻まれる動物（紋章）を紹介しましょう。まずワタリガラスがあります。ワタリガラスの神話は北方に広がっていて、ギリシア神話のゼウスのように全てのものを創ったと言われていました。クジラ、シャチ、クマなど彼らにとって身近にみられ、力が強いなど特別な動物のほか、カエルやカニやヒラメのように小さなもの、サンダーバードと呼ばれる実際にはいない動物もみられます。

トーテムポールを作った人たちは、狩猟や漁労をしていました。漁労によって富を蓄積することもでき、そのことによって、社会の中に階層ができました。また、大きなトーテムポールを作る材料となるシーダーの木が育つ地域でもありました。

トーテムポールがいつ頃できたかは難しい問題です。文字もなく、木が主体の文化のため、古いものは朽ちて残っていません。1400年代に土石流に埋まった村があり、この村の様子をみると、トーテムポールが作られていた形跡はありませんでした。つまり1400年代にはまだトーテムポールは作られてはいなかったようです。1700年代後半にヨーロッパ人がこの地域を訪れた際の記録のなかにも、まだトーテムポールは見あたりません。おそらく1800年頃から作られるはじめたのではないのでしょうか。

トーテムポールには墓標に使われたものや、何かの記念で作られたもの等、幾つかの種類があります。内部（家の柱や入り口）にトーテムポールをもつ地域はかなり範囲が広がっていますが、外にトーテムポールをもつ地域はそれほど広くはありません。

（学芸主幹 笹倉いる美）

講座

学校教育における アイヌ文化に関する講習会

主催 北海道立北方民族博物館
財団法人・アイヌ文化振興・研究推進機構

2011.7.29

講師 内田祐一氏(帯広百年記念館副館長)
伊藤せいち氏(アイヌ語地名研究者・当館研究協力員)

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(以下、略称として「アイヌ文化財団」と表記)は、アイヌ文化の振興や理解などを図る事業の一つとして、全国の小中学校に、アイヌ文化の理解促進のための学習教材『アイヌ民族：歴史と現在』を配布し、その活用を期待してきました。また、当館は、学校教育における博物館の利用促進とともに、展示やさまざまな教育普及事業をつうじて、アイヌ文化の理解を図るよう努めてきたところです。



当講座はアイヌ文化財団と当博物館が連携し、学校教育において、アイヌの文化・歴史を理解するための学習教材の活用方や博物館の利用に関する実践的講習会として企画され、網走管内の小中学校の教員等22名が受講されました。

内田祐一講師は、よくある言説「北海道の歴史は浅い」は先史文化やアイヌ文化を軽視することにつながることを、客観性をもって歴史を教えることが基本的な考え方であると述べ、小学生用「アイヌ民族：歴史と現在」の活用ポイントは、地名や周囲の自然などの身近な文化、踊りや料理などを通してアイヌ文化を理解すること、博物館の学芸員の活用にあるという。中学生用「アイヌ民族：歴史と現在」の活用ポイントとして、内容は基本的に全て歴史であり、全部を教えることは不可能で、どこをポイントとするか、歴史的出来事をコラム的に扱う方法などを提案された。さらに、博物館における総合的学習の事例紹介がされた。

伊藤せいち講師は、地域の学習教材としてのアイヌ語地名の事例を紹介された。小学校副読本(旧端野町、旧女満別町)でのアイヌ語地名の事例や網走管内4つの郡、紋別、常呂、網走、斜里の地名にかかわるアイヌ語地名研究について解説された。

最後に30分間という短い時間ながら講師と受講者との意見交換会がもたれ、具体的な体験や事例などが多く報告され、それらについて講師から助言がありました。

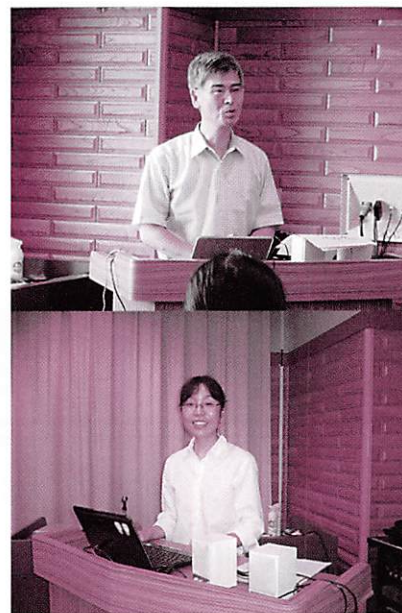
(学芸員 渡部 裕)

講座 北大民族言語学研究室出張講座

ウイルタ・カフェ 言葉と唄と遊び

2011.8.28

講師：津曲敏郎氏(北海道大学大学院教授・北海道大学総合博物館館長・当館研究協力員)
山田祥子氏(北海道大学大学院生)



お二人の講師からウイルタの言葉についてお話いただきました。津曲敏郎氏は、最初に世界の民族言語の現状、ウイルタ語と周辺の民族言語との関係、北大名誉教授の池上二良先生と編集されたウイルタ語教科書のことなど、ウイルタ語についての基本的なことを紹介されました。その後、受講者はウイルタ語で二つの

唄を習いましたが、その一つ「舟に乗ってどこへ行くの?」はウイルタ語と類縁関係にあるナーナイ語、そして系統が全く異なるニブフ語にも知られています。

もう一つの唄はサハリンで採録した「酒の唄」で、短い歌詞の訳は「決して飲むな、酒を/酒の中には悪魔がいる」です。後日、この唄の作詞者は戦前、樺太の敷香・オタスの教育所の川村秀弥教諭であったことが判明します。大人たちのアルコールの害に心を痛めた川村先生がウイルタやニブフの生徒へ戒めとして唄させたといえます。

山田祥子氏はサハリンの現地調査をもとにウイルタ語話者の現状、北と南の方言などについて解説されました。続いて、ウイルタ語による日常会話の体験、手遊び唄、新たに立ち上げたウイルタ語教室で作られたウイルタ語体操の指導があり、受講者は多くのウイルタ語体験を楽しむことができました。

会場の一角には紅茶、クラッカー、サハリン産ベリージャムやロシアのキャンディーなどが用意され、味覚でのサハリン/ウイルタ体験をも楽しむことができました。

(学芸員 渡部 裕)

原ひろ子写真展

カナダ・極北の先住民－

半世紀前の記録から

11/1(火)-12月18(日)

会場 北海道立北方民族博物館ロビー
観覧無料

1960年代初頭、原ひろ子氏は、カナダ北西部の狩猟民カショーゴティネ（ヘヤー・インディアン）の文化を調査しました。調査中に撮影された写真で、伝統文化を残しながらも白人社会の影響を受けつつあった当時の生活を紹介します。

関連事業 講座 狩猟採集民から学ぶこと
－カナダ・極北の先住民の文化と社会－
11月6日(日) 10:00-11:30
原ひろ子氏（城西国際大学教授）



INFORMATION

行事報告

◆7月2日(土)に「天都にひびけ若人の調べ♪」(演奏：網走小学校、網走第三中学校のみなさん)を開催しました。



◆7月2日(土)にポートアルバーニ・ファンクラブのみなさんが博物館中庭でポートアルバーニ・カフェをオープンしました。



◆7月23日(土)に講習会「ウイлтаのお人形「ホホー」づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆7月30日(土)に博物館クラブ「北の文様でゆらゆら動くモビールをつくろう」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆8月6日(土)に博物館クラブ「革(かわ)でつくるミニトレー」(講師：永瀬早苗解説員)を開催しました。

◆8月7日(日)に親子講習会「ウイлта文様のバッグづくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆8月20日(土)に講習会「ウイлтаの手袋「マンバック」づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆9月3日(土)に「ウイлта文化映像上映会」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆9月17日に講習会「ウイлтаの靴「ウッタ」づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

博物館運営評価委員会

6月24日(金)に第一回博物館運営評価委員会を開催しました。

ミュージアムライティング&ミュージアムコンサート

7月1日から8月31日まで、当館のライトアップが行われました。また、ライトアップ期間中にあわせ、当館では8月7日、8月8日、8月23日に東日本大震災チャリティコンサートや、アコースティックライブ、ケーナコンサートを開催しました。

北方民族博物館だより

No. 82

平成23(2011)年9月30日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会